第4部　下呂市における地域資源活用型体験交流プログラムの現状と展望

堀　　智　考*

はじめに
第1章　調査対象自治体の特徴
　1-1　下呂市の特徴
第2章　地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題
　2-1　健康づくり体験（南ひだ健康増進センター）
　2-2　森林体験
　2-3　滝めぐり体験（飛騨小坂滝めぐり）
　2-4　自然体験
　2-5　農業体験
　2-6　歴史・伝統文化体験
第3章　子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性
　3-1　学校教育における可能性と課題
　3-2　地域活性化における可能性と課題
第4章　実施（または発展）に向けた提言
おわりに

はじめに

本論文は、岐阜県内の優れた体験交流事業を、子どもたちの学びの機会として提供し、都市・農村間の交流人口の増加を目指すことを目標に、「下呂市における地域資源活用型体験交流プログラムの現状と展望」としてとりまとめたものである。

2007年3月に岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部がとりまとめた「地域資源を活用した『子どもの遊び場の創出』と観光資源化に関する調査研究」では、地域資源を活かした体験型観光プログラムを構築し、地域を子どもたちの交流や学び場とすることにより、日帰り・見学型観光から滞在・体験型観光へ転換を図るひとつの手法と提言している。今回は、その提言をより深化させ、具現性を高めるため、地域と共生する岐阜経済大学40周年記念事業として、2度にわたり下呂市において、現地調査を実施し、体験交流事業の現状と課題を分析しながら、具体的な提言をまとめたものとなっている。

国では、2006年12月に観光立国推進基本法が制定され、「国際競争力の高い魅力ある観光地の形成」による地域活性化政策を目指して、様々な規制緩和や支援措置がなされ、地域が主体的に創意工夫し、魅力ある滞在型観光地づくりに一層取り組みやすい環境が形成されつつある。また、今回の調査と全く同時期に、総務省や文部科学省、農林水産省が連携し、全国の小学生120万人が農山漁村で長期宿泊体験をすることを目指す「子ども農山村漁村交流プロジェクト」も開始されており、下呂市と同様に市町村合併を通じて広大な面積を持ち、観光面では競合関係にある高山市及び郡上市が県内のモデル地域に選定され、一歩先行した取組が推進されていく予定である。こうした意味からも、下呂市をはじめ、今後、新たに観光対策や地域活性化策に取り組む地域住民や観光関係者に、今回の調査研究が少しでも役立つことを期待したいと考える。

第1章　調査対象自治体の特徴

1-1　下呂市の特徴

下呂市の地勢

下呂市は、岐阜県の中東部に位置し、北は高山市、南は加茂郡、西は郡上市、関市、東は中津川市と長野県に接している。下呂市の面積は851㎢であり、県内では高山市（2,178㎢）、郡上市（1,030㎢）に次ぐ、県内第3位の広大な面積を持っており、森林が91.8%を占め、河川に沿った平坦地とゆるやかな斜面を利用して、農業地、商業地、住宅地などが混在している。市域のほぼ中央を飛騨川が南へ流れ、西には馬瀬川がある。

また、御嶽山をはじめ河川の両側には山並みが迫り、『飛騨木曽川国定公園』や『岐阜県立自然公園』なども位置する岐阜県内有数の自然豊かな地域である。また、飛騨川に沿って国道41号やJR高山本線が通り、横断する形で国道

*地域経済研究所奨励研究員

256号、国道257号が通じている。

下呂市の沿革及び方向性

下呂市は、2004年３月１日、旧益田郡の萩原町、小坂町、下呂町、金山町、馬瀬村の５町村が合併して誕生した。市役所の位置は旧下呂町役場となっており、旧萩原町役場は市役所萩原庁舎、３町村役場は振興事務所として機能している。

下呂市には、江戸時代の儒学者林羅山が、有馬・草津と並ぶ天下の三名泉と表した下呂温泉をはじめ、市内には通年営業の温泉として日本一標高の高い「濁河温泉」など、８ヶ所にわたる温泉地と豊かな自然に恵まれている。

現在、この資源を生かし、岐阜県と下呂市を中心に周辺市町が一体となって、癒しを求める時代の潮流の中、健康美容活力をテーマにした「南飛騨国際健康保養地」づくりを進めている。また、下呂市では、地元の人々が大切にする習慣や食文化を守りながら、農林業と観光が結びついた「地産地消」の観光立市を目指している。

下呂市の人口

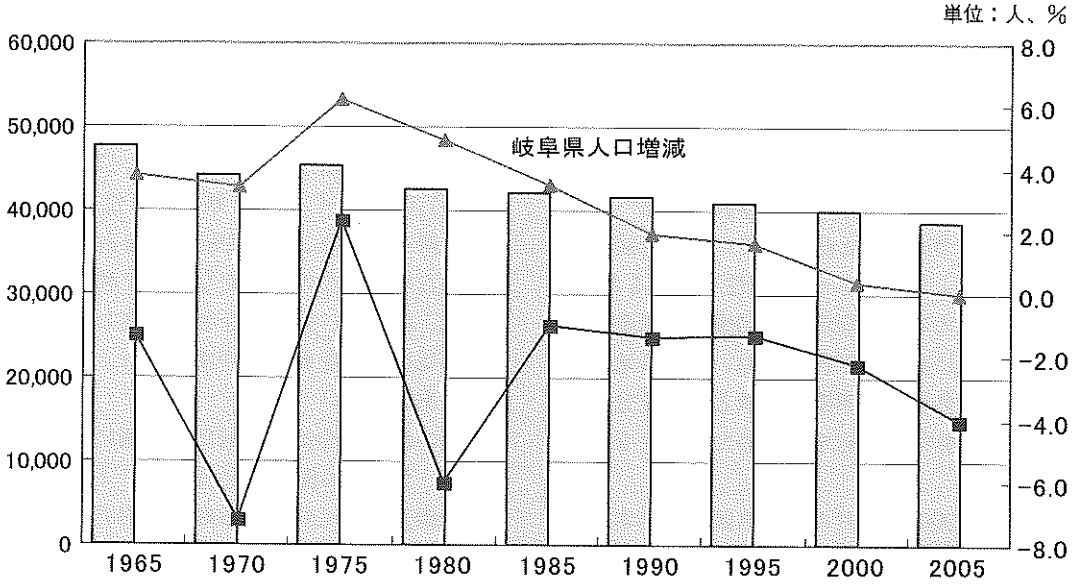
県全体では、近年人口減少に転じたが、下呂市の人口は、1975年以降、長期にわたり減少し続けており、最近では減少率が増大傾向にある。地域別に最近25年間（1985～2005年）の地域別内訳をみると、市全体で9.6％減少するなか、旧萩原町（2.6％増）や旧下呂町（8.1％減）の中心部に比べて、旧金山町（21.2％減）、旧小坂町（20.7％減）、旧馬瀬村（11.8％減）など周辺部で大きく減少しており、地域間格差が著しい。

また、年齢３区分別の人口構成比では、年少人口（15歳未満）は19.8％から13.5％に大きく減少する一方、老年人口（65歳以上）は15.4％から29.8％とほぼ倍増しており、急速な高齢化が進展している。今後の人口動向としては、下呂市第１次総合計画においても2014年の目標人口を36,000人と設定するなど、人口減少と高齢化の進展が長期にわたり続いていくことを予測している。

下呂市の産業構造

下呂市の産業構造について、国勢調査（2005年）による産業別就業者割合をみると、第１次産業は5.7％、第２次産業は32.1％、第３次産業は62.2％となっている。また、県平均や飛騨

図１　下呂市人口の推移



（出典）総務省「国勢調査」より作成

表1　産業別就業者割合

単位：%

区　分	県計	飛騨圏域	下呂市
農林水産業	3.7	9.3	5.7
製造業	25.2	15.7	18.6
建設業	9.4	12.8	13.4
卸売・小売業	17.4	16.1	14.5
飲食店・宿泊業	5.2	10.4	13.0
医療・福祉	7.9	8.4	8.7
サービス業	13.3	11.7	11.8
第1次産業	3.7	9.3	5.7
第2次産業	34.7	28.6	32.1
第3次産業	61.0	62.0	62.2

(出典) 総務省「国勢調査」より作成

表2　下呂市の市町村内総生産

単位：百万円、%

区　分	8年度		17年度		増減数	増減率
	実額	構成比	実額	構成比		
農林水産業	10,362	6.6	2,633	2.1	−7,729	−74.6
製造業	25,604	16.4	22,075	17.3	−3,530	−13.8
建設業	25,640	16.4	8,462	6.6	−17,178	−67.0
卸売・小売業	14,857	9.5	10,415	8.2	−4,442	−29.9
金融・保険・不動産業	18,812	12.0	20,044	15.7	1,232	6.5
サービス業	35,847	22.9	36,944	29.0	1,097	3.1
合計	156,282	100.0	127,275	100.0	−29,007	−18.6
第1次産業	10,362	6.6	2,633	2.1	−7,729	−74.6
第2次産業	52,372	33.5	30,985	24.3	−21,387	−40.8
第3次産業	97,785	62.6	98,136	77.1	351	0.4

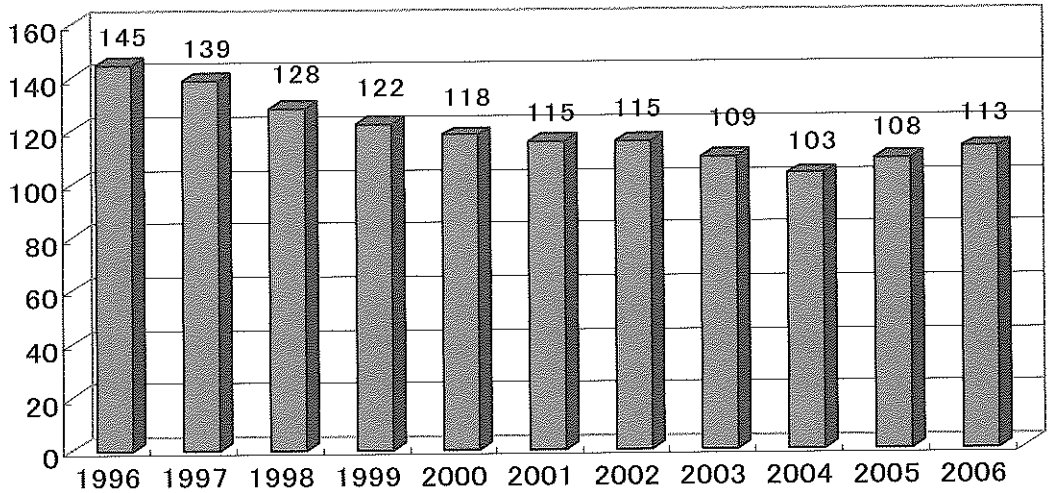
(出典) 岐阜県「市町村民経済計算」より作成

圏域と比べて、第2次産業では建設業(13.4%、県内第7位)の割合が最も高く、第3次産業では飲食店・宿泊業(13.0%)が白川村(20.3%)に次いで県内第2位と著しく高くなっている。さらに、職業分類別就業者割合では、下呂市のサービス職業従事者は白川村に次いで県内2位と高く、下呂市の産業構造は観光関連産業に特化した就業形態になっていることがわかる。

また、下呂市の最近10年間の産業別総生産額の推移をみると、第1次産業(△74.6%)と第2次産業(△40.8%)が著しく低下しており、特に第1次産業では木材価格の低下などに伴う林業(△86.6%)の衰退、第2次産業では公共投資の減少等を背景とする建設業(△67.0%)の低迷が要因となっている。一方、第3次産業は若干増加(0.4%)しており、下呂温泉のホテル・旅館など観光関連産業を中心とするサービス業が基幹産業として、下呂市の経済基盤を

図2　下呂温泉宿泊客数の推移

単位：万人



(出典) 下呂市観光課「観光統計」により作成

表3　下呂温泉宿泊客の内訳

単位：人

区分	1996年		2006年		増減数	増減率
	宿泊客数	構成比	宿泊客数	構成比		
県内	356,164	24.6	224,505	19.9	−131,659	△ 37.0
愛知県	434,438	30.1	358,445	31.8	−75,993	△ 17.5
中部地方	154,951	10.7	112,375	10.0	−42,576	△ 27.5
関東・関西	426,061	29.5	361,728	32.1	−64,333	△ 15.1
海外	1,331	0.1	11,251	1.0	9,920	475.3
その他	72,328	5.0	58,123	5.2	−14,205	△ 19.6
計	1,445,273	100.0	1,126,427	100.0	−318,846	△ 22.1
鉄道	314,035	21.7	179,089	15.9	−134,946	△ 43.0
観光バス	461,389	31.9	280,057	24.9	−181,332	△ 39.3
自家用車	666,817	46.1	647,570	57.5	−19,247	△ 2.9
その他	3,032	0.2	19,711	1.7	16,679	550.1
計	1,445,273	100.0	1,126,427	100.0	−318,846	△ 22.1

（出典）下呂市観光課「観光統計」により作成

下支えしていることがわかる。

下呂市観光の現状

下呂市の観光は、草津温泉、有馬温泉と並んで「日本三名泉」に数えられる温泉地であるとともに、ホテル、旅館、保養施設が集積する下呂温泉が中心であり、年間約113万人（2006年）の宿泊客を集めている。また、下呂温泉以外にも、市内には湯谷温泉、濁河温泉、飛騨金山温泉など7ヶ所の温泉地があり、県内有数の一大観光地となっている。

しかし、宿泊客の大多数を占める下呂温泉の宿泊客数は、最近3年間では、愛・地球博（愛知万博）（2005年）開催などに伴い微増傾向にあるが、長期的には、1990年の約165万人をピークとして、長期間にわたり減少傾向にある。下呂温泉の宿泊客減少の理由としては、旅行の形態の変化に伴い慰安旅行などの団体旅行が大幅に減少しており、グループ・個人旅行へとシフトしたことが大きな要因となっている。

また、宿泊客（2006年）の内訳をみると、県内が約2割、中部地方が約3割、関東・関西で約3割となっており、特に外国人宿泊客は10年間で約8倍に急増している。さらに、利用する交通形態については、旅行形態の変化に伴い電車やバスなどの公共交通機関から自家用車へと変化してきている。

下呂市観光の課題及び今後の方向性

下呂市の観光は、主に下呂市（行政）と旧5町村単位の観光協会（民間）が協力して、政策を展開しており、その役割分担としては、行政は、計画づくりをはじめとする長期的な政策を実施する一方、民間は、観光誘客キャンペーンなど短期的な政策を行っている。ここでは、下呂市及び市内最大の観光協会である下呂温泉観光協会としての課題及び今後の取り組みの方向性を紹介する。

下呂市では、下呂温泉と体験交流プログラムを組み合わせた「滞在型温泉地」づくりへの転換を最大課題としている。現状では、下呂地域には、ゆっくり滞在して楽しめる観光施設がないため、自然や歴史・文化体験等小坂や馬瀬、金山など広域合併した周辺地域における地域資源とも連携した広域的な観光ルートづくりに向けて、重点的な取り組みを推進していく予定である。

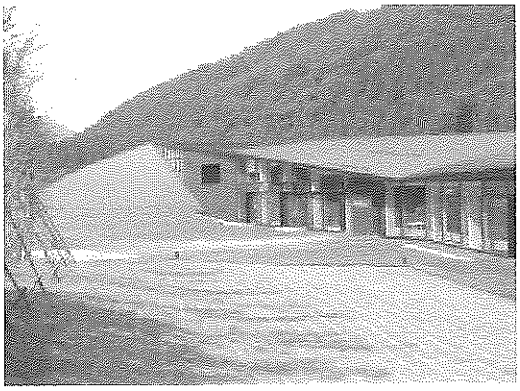
第1としては、体験交流プログラムの提供体制整備を課題としており、ハード面では、交通ルートの確保や誘導看板などの整備を推進していく。また、ソフト面としては、過去にも農業体験や自然体験などの体験交流プログラムを提供できる団体が存在していたが、長続きしなかった事例が多数あったため、提供主体がNPO法人化するなど、生業的に自立化し、持続的な活動を推進できる体制づくりを支援することを目指している。

第2としては、下呂市内にある体験交流プログラムの情報発信による宿泊施設との有機的な連携体制づくりの推進である。下呂市では、これまでグリーンツーリズムをあまり推進してきていないため、旅行会社やホテル、旅館等の地元観光関係者が下呂市内にある体験交流プログラムを認知しておらず、旅行商品化されていない状況にある。このため、地元観光関係者が市内の素晴らしい地域資源を理解し、宿泊施設と体験交流プログラムを有機的な連携主体へつなげる取り組みを推進していく。また、プログラム提供団体とも連携し、温泉と自然ウォーキングや里山体験等との旅行商品化を推進し、成功事例を積み重ねながら、宿泊施設と体験交流プログラムとの連携を実現していく意義は大きい。

次に、多数のホテル・旅館等から構成される下呂温泉観光協会の課題としては、第1として、下呂温泉街の宿泊客には、リピーターが多くおり、ハード・ソフトの両面から、下呂温泉街全体のおもてなしが重要と認識している。特に、温泉街をゆっくりと巡る個人宿泊客が多くなってきており、町並みを整備しながら、スタンプラリーや温泉玉子販売など、街歩きを誘導する仕掛けづくりの推進が求められている。

第2として、「2010年までに1,000万人の訪日外国人誘致」の実現を目指すビジット・ジャパン・キャンペーンとも連動し、下呂温泉街にも海外からの宿泊客も積極的に受け入れるため、下呂駅前の観光案内所に外国人向けサービスを充実したり、台湾に事務所を設置するなど、外国人誘客に向けた情報発信を積極的に取り組むことが急がれる。

第3として、下呂温泉街としても、市町村合併のメリットを活かし、滞在型観光へと転換するため、下呂市内巡りの仕組みづくりを課題としている。現在、各地域の観光協会とも連携し、体験交流プログラムづくりにも取り組んでおり、例えば、健康保養地温泉づくり委員会では、健康づくりメニューやモデル旅行商品づくりを進めるなど、一部のホテルや旅館では、滞在時間を増やす工夫に取り組む事例も出てきている



南ひだ健康増進センターの外観

が、まだ大きな実績には至っていない。このため、広域観光として、市内の体験交流プログラムと宿泊施設との連携を進め、滞在の魅力を高める取り組みを促進していくことが重要である。

第2章　地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題

第2章では、下呂市へ2回の「岐阜ほんもの体験交流プログラム」現地調査を通じて、実態把握ができた下呂市内の地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題を紹介する。

2-1　健康づくり体験（南ひだ健康増進センター）

南ひだ健康増進センターでは、岐阜県が提唱する「岐阜メソッド健康五法（自然治癒力を強化し、病気にならないようにする健康法）」を普及する中核拠点として、健康美容法を気軽に楽しみながら、学習・体験できる「健康道場」の役割を果たしている。このため、健康学習センターを中心に様々な健康体験施設があり、そば打ちや薬草酒づくりなど、楽しみながら学べる健康法の体験講座が毎日開催されるなど、学習とレジャーを兼ねたひとときを過ごせる空間となっている。

体験交流プログラムには、毎日健康体験できる常設講座をはじめ、季節に応じた講座など、自然体験や自然観察、自然環境教育、ものづく

表4　南ひだ健康増進センターの主な体験種類・料金

体験メニュー	料金	体験メニュー	料金	体験メニュー	料金
そば打ち	700円	健康菓子づくり	300円	郷土料理づくり	500円
太極拳	100円	真向法体操	100円	ヨーガ	100円
シェイプヨーガ	100円	東洋療法（ツボ）体験	100円	リフレクソロジー体験	100円
足うら健康法体験	200円	森の健康ウォーク	200円	野草の寄せ植え	200円
ちぎり絵	300円	野草を食べよう（てんぷら200円、薬酒500円）			
野草の押し花	200円	クラフトアート	200円	薬草染め	300円
木工クラフト	200円	草花を描こう	200円	薬膳講座	500円

（出典）南ひだ健康増進センター「パンフレット」により作成

り体験など30種類以上の多様なメニューが用意されている。特に、小学生には木工クラフト、健康菓子（げんこつづくり）など、ものづくり体験が人気を集めており、県内外からも様々な利用がある。また、健康学習センター内には、無料で脳年齢、血管年齢、骨強度、ストレス測定など自分で健康チェックできる測定器があり、自分の健康をチェックすることも可能である。

また、体験交流プログラムは、地元の関係団体等との連携体制のもとで提供されており、10名以上の団体で利用する場合、薬草染め、お茶の間筋トレ体操、薬草の森観察講座など団体向けメニューが用意されており、希望日に希望の体験講座を受講することができる。さらに、団体向けの宿泊施設として、廃校舎を改築して整備された下呂市宿泊研修施設の「位山自然の家」が近隣にあり、低価格で利用することも可能となっている。

今後の課題としては、下呂市では、下呂温泉を核とした多様な地域資源を活用した滞在型プログラムとして、温泉と地元産の食材でもてなし、健康回復をめざす健康保養地温泉地づくりが推進されているが、その一翼を担う機関として、相互連携・強化を図り、県内外の健康づくりの拠点として、滞在型の体験交流プログラムの役割を果たしていくことが期待される。

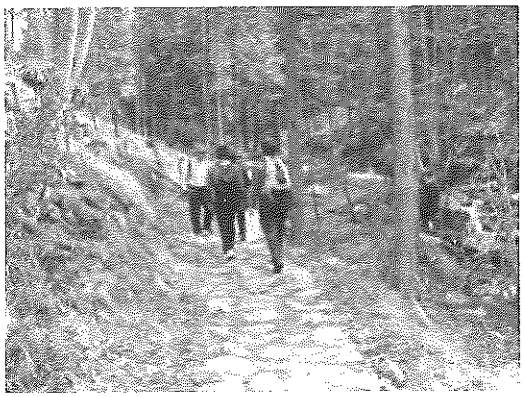
2－2　森林体験

①森林環境体験

2006年に下呂市で開催された第57回全国植樹祭でのテーマ「子どもたちとつくる未来の森」を目指して、2007年度より下呂市内の小中学生を対象にした森林環境学習を実施している。下呂市や教育委員会、森林管理委員会、森のなりわい研究所等で構成される「下呂市森林環境学習支援機構」が実施主体となり、南ひだ健康道場や位山自然の家、岐阜大学演習林等を活用しながら、1泊2日の体験交流プログラムを設定している。2007年度実績としては、市内14小中学校の延べ976人の児童・生徒が、森林散策や林業作業体験、かわげら観察など様々な森林環境学習を体験している。

この取組みは始まったばかりであり、アンケート調査等によるフォローアップを実施し、プログラム内容を見直すとともに、協力関係にある構成団体に加え、他の教育施設とも連携した学習支援機構として、さらに体制を充実させながら、市域外の小中学生や一般人も対象にした森林環境学習プログラムを企画し、提供していく予定である。

今後の課題としては、指導者や予算、場所など森林環境教育を常時提供できる体制づくりが問題となる。特に、指導者については、絶対数が不足しており、森の案内人ネットワークやシルバー人材等を活用しながら、人材育成を進めていく必要がある。



森の健康ウォークの風景

飛騨小坂滝の風景

②森林セラピー（森林療法）体験

南飛騨健康増進センター内において、森林浴や森林レクリエーションなど心安らぐ体験メニューを通じて、健康づくりにつなげる森林セラピー（森林療法）が実施されている。

森林では、空気中にマイナスイオンを多く含むため、副交感神経に作用し、身体や気持ちをリラックスさせる効果や精神安定、開放感、ストレスの解消など安らぎを与えてくれる効果など、ストレスコントロールに非常に効果があるとされており、森林での体験交流プログラムは森林セラピー（森林療法）と呼ばれている。

体験メニューには2種類あり、「森の健康ウォーク」では、森の案内人のガイドにより、勾配のある散策路を2時間ほどウォーキングして、森での正しい歩き方を学び、「森でリラックス」では、川のせせらぎや爽やかな風、森の木々や草花、小鳥のさえずりなどリラックス体験を味わことができる。年間利用者数は800～1,000人程度であり、土日を中心に年間120日程度実施されており、参加費は1人200円と非常に安価となっている。

また、森の案内人は8人、アシスタントは9人登録されており、1人が月2回程度活動を行っているが、基本的にはボランティアであるため、平日は対応できない状況にある。

今後の課題としては、森の案内人が不足しており、人材育成を進めていく必要がある。また、民間企業の福利厚生事業を視野に入れた取組みにつなげていくことを目標としていることからも、そのためには、森の案内人による森林体験だけではなく、医療機関とも連携して、健康診断（問診、血圧測定、ストレス測定など）を実施したり、森林セラピー基地として認定を受けるなど本格的な森林療法の実施に向けた体制づくりが必要となる。

2－3　滝めぐり体験（飛騨小坂滝めぐり）

御嶽山麓の飛騨小坂地域では、落差5m以上の滝が216箇所あり、標高2,800mの日本最高所の滝が確認されるなど、日本一の滝の名所となっている。しかし、観光客も48万人(1998年)から32万人（2006年）に落ち込む状況のもと、2004年8月に「NPO法人飛騨小坂200滝」が設立され、滝めぐりを通した体験交流プログラムの提供が始まっている。

滝には、滝つぼからほとばしる水しぶきにより、空気中にマイナスイオンが多く発生しており、このマイナスイオンを浴びることを通じて、副交感神経を刺激して、解放感や安らぎ感をもたらす効果に加え、流れ落ちる滝の音や森林、水の香りも気分をリラックスさせる効果を持つため、滝めぐり体験は、別名滝セラピーとも呼ばれ、注目されている。

飛騨小坂滝めぐりには、厳立峡から遊歩道が整備され、比較的容易に散策できる「三ッ滝」や、江戸時代から書画の題材にされ、落差63mもある「根尾の滝」（徒歩で3時間）など、難易度に合わせて「13コース（109滝）」が設定されている。

フィッシングセンター水辺の館の外観

また、NPO法人（構成員93人）のうち、約12人が中心となり、ガイドによる滝めぐりを実施しており、親切で丁寧な案内ツアーがなされている。ガイドは、基本的に観光客10名にガイド1名が対応し、料金は10,000円／人で、約3時間コースが標準的であるが、コースの設定や案内時間等は柔軟に対応することが可能となっている。

今後の課題としては、下呂市民向け滝めぐりツアーが実施されたり、旅行代理店のツアー先となるなど、年間約1,500名が訪問する観光スポットとなりつつあるが、下呂温泉の宿泊施設等との連携体制が不十分である。このため、滝めぐり体験・理解を深めるための取り組みとして、ホテル・旅館等の従業員（おかみやフロントマン等)向けの滝めぐりツアーを企画したり、紅葉時期に下呂駅から厳立峡まで1日2回周遊バスを運行するなど、相互連携が始まっているが、一層の下呂と小坂との広域的な観光連携に向けた体制づくりが求められている。

2－4　自然体験

①釣り体験

「フィッシングセンター水辺の館」は、下呂市馬瀬地域の南端、清流馬瀬川に面した親水体験施設であり、全国の釣り人のメッカである清流馬瀬川を舞台として、精錬された釣りマナーと高い釣り技術をマスターし、風格ある釣り人の養成を目指す「馬瀬川フィッシングアカデミー」が開催されている。

フィッシングアカデミーでは、渓流釣りやアユ友釣り向けに、プロ講師による馬瀬川での釣り技術の実技や仕掛け指導等が実施されたり、初心者や女性向け講座が開設されるなど、多様なメニューが用意され、釣り人口の増加に向けた普及的役割を果たしている。

表5　フィッシングアカデミーの開催状況（2007年度）、川と自然体験メニュー

イベント日程	体 験 メ ニ ュ ー	定員	実績	料金
5月12日～13日	テンカラ釣り講座	15名		14,000円
5月19日～20日	フライフィッシング講座	15名		14,000円
5月26日～27日	ルアーフィッシング講座	15名		14,000円
6月9日	鮎釣り体験講師養成講座　※講師を認証するための講座	—	11名	無料
6月10日	鮎川見・仕掛け講座	20名	5名	5,000円
6月30日～7月1日	アユ友釣り講座（中級編）	15名	21名	16,000円
7月～8月土日祝祭日	初心者アユ友釣り教室（日帰り）	2名以上	43名	6,000円
7月28日～29日	レディースフィッシングスクール	20名	中止	12,000円
7月29日	馬瀬川鮎釣りレディース大会	20名	中止	5,000円

体験メニュー	料　金　等	時期
あまごつかみどり	5匹2,000円　10匹3,000円　以降1匹ごとに300円	5月～8月
釣り体験	レンタル竿（渓流魚1,000円、鮎友釣り1,500円）	7月～8月

（出典）馬瀬川フィッシングアカデミー「アカデミーだより」により作成

また、「フィッシングセンター水辺の館」では、フィッシングアカデミー以外にも、川との自然体験メニューとして、あまごつかみどり、水辺のバーベキュー、釣り体験も用意されている。また、隣接する「さんまぜ工房」では、食と自然の体験メニューとして、そば打ち教室、豆腐づくり、こんにゃくづくり、草木染め、リースづくりなどが用意されるなど、清流の馬瀬川の恵みを体験できる多様なメニューが周辺地域一帯で展開されている。

今後の課題としては、渓流釣りやアユ友釣りの新たな講師養成は難しい状況のもと、地元経験者から講師として協力してもらうことが求められる。また、かつて旧馬瀬村の一大イベントして、多数の女性を釣りの魅力に引きつけたレディースフィッシングスクールが、人数が集まらず中止になるなど、清流馬瀬川を通じた地域活性化策に対する地域関係者はもとより下呂市全体が盛り上げ、支えていく仕組みを再構築していく必要がある。

②清流セラピー体験

清流馬瀬川では、NPO法人馬瀬川プロデュースが主体となり、ウェットスーツに身を固め、滝つぼや淵での飛び込み、水泳、魚の観察など、本格的な川遊びや沢のぼりが体験できるプログラムを提供している。体験交流プログラムは、約1時間ほどで到達できる比較的簡単な沢登りであるが、途中岩登りをしたり、水中や岩のトンネルをくぐるなど、エキサイティングな体験ができる。また、到達地点の不動明王の滝では、落差21mの滝つぼに飛び込んだり、泳いだり、様々な遊び方ができ、往復3時間のプログラムは、ガイド・装備レンタル付きで料金は4,500円となっている。

清流セラピー体験事業として、2007年度には7回実施され、指導者養成講座を開催している。また、NPO法人同士の交流事業から犬山市内の小学生22名が参加したり、地元小学校の教員や飛騨地域に赴任した英語指導助手が体験活動に参加するなど、徐々に清流セラピー体験も定着し始めている。さらに、2008年度からは、総合学習の一環として、地元馬瀬中学校が実施する1泊2日の自然体験研修の一環として、不動明王の滝までの沢のぼりもメニューとして組み込まれる予定である。

フルーツトマトもぎ取り風景

今後の課題としては、①指導者養成講座を充実し、指導者不足を解消すること、②危険を伴うプログラムであり、保険等を含めた安全管理と情報の公開、③体験事業のPR強化と類似企画との差別化など事業運営に向けた体制づくりの充実が必要、などがあげられる。同時に、他地域にある同様な活動団体とうまく協調しながら、ネットワークによって顧客のほりおこしと多様なニーズに対応するための新メニューの開発などに投資を続けることが急がれる。

2-5　農業体験

①フルーツトマトもぎ取り体験（栃本農園）

栃本農園では、トマト「桃太郎」を主に栽培してきたが、2002年から「フルーツトマト」の栽培を始めた。標高580メートルの高地が作り出す昼夜の温度差と土づくり・肥料等の研究を通じて、7月から10月の長期にわたり、既存のトマトのイメージを覆す甘さをもったトマトを常時収穫し続けることに成功した。

栃本農園のフルーツトマトは、トマト栽培の盛んな竹原地区においてもオンリーワン的な存在であり、下呂温泉の旅館では、地元産食材として活用されたり、土産品として店頭で販売されるなど、大変な好評を得ている。また、自分の手で収穫し、もぎたてを味わうことができる体験農園として開放しており、口コミや下呂温

泉旅館との連携による誘客作戦により、年々順調にもぎ取り体験客が増加してきており、2006年には県内外から約2,000人が訪問している。

フルーツトマトのもぎ取り体験は、7月～10月までの3ヶ月間、毎日10：00～17：00まで体験できるが、完全予約制となっており、団体客は1回当たり30名が限度なっている。料金は1kg当たり800円となっており、小中学生には割引もあり、土産品として宅配サービスも受け付けている。なお、基本的に、幼児から年配者までの個人客を対象としているが、1回に付き40人まで団体客も受け付けている。

なお、秋から冬は温度・湿度管理により椎茸をブロック栽培し、JA飛騨に出荷している。後継者もあり、将来設計の一部に加工品・宿泊もあり、更なる発展が期待されている。

②ブルーベリー摘み取り体験（田上農園）

栃本農園は、トマト栽培農家であったが、8年前よりブルーベリー栽培に関心を持ち、5年前よりブルーベリー園として、本格的な栽培を始めた。最近、ブルーベリーは順調に成長したが、実の収穫・出荷は家族だけではできない大変な作業であったことや、下呂温泉にも近く、宿泊客の周遊コースと期待できることもあり、2007年より一般客が摘み取る観光農園して、スタートすることとなった。

ブルーベリー園としては、比較的規模が小さく、受入体制も未整備のままでスタートしたが、地元広報誌に掲載されると大きな反響を呼び、テレビやラジオ、新聞などでも取り上げられた結果、収穫期の6月下旬～9月上旬の3ヶ月間で約1.200人が訪問している。料金は食べ放題＋土産1パック付きで、中学生以上800円、小学生500円、幼児無料と手頃な値段となっている。客層は、主に家族連れや若い女性が多くみられ、約6割が愛知県からの訪問客であり、まさに下呂温泉旅館での宿泊客が身近に楽しめる絶好ポイントとなりつつある。PR手法としては、国道257号線に誘導看板を設置したほか、下呂市のHPや数件のホテルにチラシを置かしてもらっている。今後は、インターネットでPRできるよう、独自のHPを準備している。

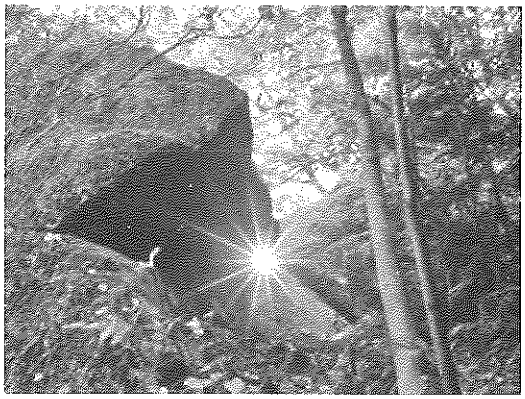
今後の課題としては、旅館・ホテルからは通年での営業を期待されており、雨天時の対応も必要となることから、ビニールハウスでの温室栽培を拡大していくとともに、ブルーベリー以外の果物栽培も取り組むことを予定している。また、下呂地域には、栃本農園フルーツトマト、田上農園ブルーベリーなど種類の異なる農業体験プログラムが多数あることから、下呂温泉旅館等とも相互連携しながら、体験メニューの多様化と誘客規模の拡大、周年化をめざしている。

③稲作体験（米ほたるの会）

米ほたるの会では、約10年前に米の販売先である高蔵寺生活協同組合において、米の安全性を確認するため、組合員向けに現地見学ツアーを実施したことがきっかけとなり、都市部消費者と農村部生産者との交流事業として、田植えや稲刈りなど農業体験を提供するプログラムを提供してきている。

体験メニューとして、①田植え体験（4～5月）、②田の草取り体験とほたる観察（5～6月）、③もち米収穫と餅つき（収穫祭：9～10月）の年3回にわたり、家族単位等30人規模を受け入れている。料金は、大人1,000円、子ども500円となっており、農業体験ばかりでなく、バーベキューも体験でき、廃鶏やあまごなど地元産品を味わいながら、参加者同士で田舎を体験・交流できる企画としている。

なお、PR手段として、インターネットでは



金山巨石群の風景

参加者は募集はしておらず、高蔵寺生活協同組合による組合員向けの会報誌や口コミ等を通じて、参加者を募っている。

また、米ほたるの会では、都市部消費者向け農業体験事業ばかりなく、金山地域の地元小学校4校のうち3校における学校農園での苗の提供、籾を持ち込んでの精米等、10年以上にわたり、農業体験にも協力している。

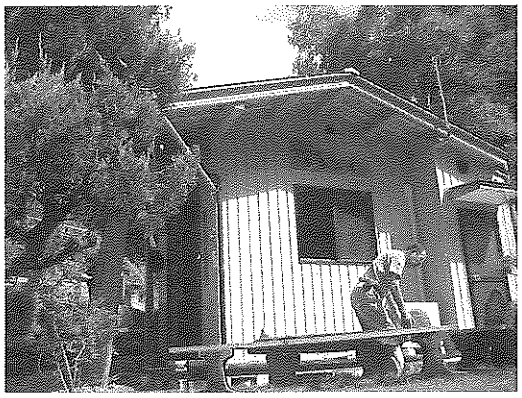
2-6　歴史・伝統文化体験

①縄文文化体験（金山巨石群）

岩屋ダムの周辺には、県史跡文化財に指定されている岩屋岩陰遺跡をはじめ、イギリスのストーンヘンジを彷彿させる3箇所の巨石群(「岩屋岩陰遺跡巨石群」、「線刻石のある巨石群」、「東の山巨石」）が並んでいる。この巨石群には、古代縄文時代に夏至の頃を基準とした太陽暦が行われていたことを証明する記号表現が刻まれた痕跡がみられ、巨石の石組みから差し込むスポット光の観測などにより、1年間の正確な日数や夏至と冬至などの周期を読み取ることができる巨石日時計であることが明らかとなっている。金山巨石群調査室では、考古天文学的にも大変貴重な遺跡である金山巨石群の説明パネル等を展示したり、冬至・春分・夏至・秋分の日の年4回、巨石群を巡る体験ツアーを企画するなど、積極的なPR活動を展開している。

最近では、大手旅行代理店が企画したミステリーツアーには、この金山巨石群を巡るコースが設定され、名古屋周辺から多数の観光客が参加している。詳細なコースとしては、下呂駅を起点にボンネットバスに乗り、金山巨石群で約1時間説明を受けるとともに、馬瀬の美輝の里で入浴し、下呂駅に到着する日帰りコースであり、2007年7月末から数回実施されるなど、観光スポットとしても注目を浴びてきている。また、ツアー以外でも全国各地から直接訪問することが多数あり、調査室では予約に応じて、25人を上限として、1時間6,000円で現地ガイドを実施している。また、地元金山中学校では、説明会を開催し、毎年1年生約70人が現地見学を実施している。

今後の課題として、現地のガイドは2人体制であるため、1回25人までしか対応できないため、多数の児童生徒を受入れるためには、サポート体制が必要となっている。



下呂石工房の外観

②石器・縄文文化体験（下呂石工房）

下呂石は、約10万年前に下呂温泉街の東にある湯ヶ峰火山の噴火によりできた黒色ガラス質の火山石であり、やじりなどの石器の材料に使用されていたことがわかっている。また、下呂石は、石器時代には信州の「黒曜石」と並ぶ貴重な石とされており、縄文時代には石器の石材の交易も盛んになり、中部地方だけでなく関東地方や近畿地方、北陸地方でも発見されている。特に、下呂石は川を転がって木曽川流域の遺跡で多く出土し、山を越え長野県上伊那郡南箕輪村では下呂石の石器が国指定重要文化財になっている。下呂石工房では、下呂石シンポジウムを開催するなど、下呂石の普及啓発活動を展開する一方、下呂石の岩盤が露出している現地見学とその周辺の歴史の講義や、下呂石を活用した石器づくりの体験学習、石琴の音楽鑑賞、音楽体験などの体験交流プログラムを提供している。特に、地元の小中学生や教師向けには、年間十数回にわたり、約半日間をかけて、下呂石の岩盤が露出している現地周辺の見学や講義を実施したり、下呂石を割ったナイフや下呂石を銅線で削った矢じりなど2時間程度の石器づくりの体験学習を実施している。

今後の課題としては、指導者が少数であるた

め、1回35人までしか石器づくり体験ができないため、多数の児童生徒を受入れるための指導者養成が必要となっている。

第3章　子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性

第3章では、子どもの体験交流型学習の機会として、下呂市での農山村体験交流事業の可能性及び課題について、学校教育と地域活性化の2つの側面から検討する。

3－1　学校教育における可能性と課題

児童・生徒向け体験交流プログラム

第2章で紹介したとおり、既に多数の児童・生徒が参加している森林環境体験をはじめ、清流セラピー体験や石器・縄文文化体験、縄文文化体験など、市内の小中学校が参加または参加予定の体験交流プログラムが多数存在している。また、健康づくり体験や農業体験（フルーツトマトもぎ取り体験、ブルーベリー摘み取り体験、稲作体験）では、多数の都会の子ども達を受入れているなど、下呂市内では、学校での教育活動に十分に活用できる多様な教育資源となる体験交流プログラムを保有している。また、こうした農山村での体験学習は、子ども達に対する農山村の自然や生活、文化などへの興味・関心、学習意欲の向上や体験を通じた問題発見・解決能力の育成、豊かな人間性や社会性の向上などにつながると言われている。

このため、宿泊施設とも連携しながら、児童・生徒が宿泊して、各種体験学習ができる農山村体験交流事業を展開するなど、下呂市全体で子どもを育てる環境・ネットワークづくりを進め、地域全体が開かれた学校として機能を果てしていくことが期待される。

下流域の子どもとの交流促進

下呂市では、木曽川上流域に位置する馬瀬川にある岩屋ダムがあるとともに、総面積の91.8%を占める森林を有しており、渇水や洪水を緩和し、良質な水を供給する水源涵養機能や土砂災害防止機能など公益的機能を果たしている。この恩恵を受けている下流域住民は、東海3県38市町村、約425万人に及んでおり、下呂市ではこうした受益市町村との交流事業が実施されているが、あまり積極的な交流事業とはなっていない。

また、学校交流事業としては、以前に名古屋市や春日井市の小学校との交流が実施されてい

表6　下呂市と岩屋ダム受益市町村との地域間交流の実績

Ⅰ　岩屋ダム受益市町村（給水人口　約425万人）　★：工業用水受益地
・愛知県13市9町1村
　名古屋市、一宮市、春日井市、津島市、犬山市、江南市、小牧市、稲沢市、岩倉市、愛西市、北名古屋市、清洲市、弥富市、豊山町、春日町、大口町、扶桑町、七宝町、美和町、蟹江町、甚目寺町、大治町、飛鳥村
・岐阜県3市5町
　美濃加茂市、関市、富加町、川辺町、七宗町、八百津町、★可児市、★御嵩町
・三重県5市2町
　四日市市、桑名市、鈴鹿市、土別市、木曽岬町、川越町、★津市

Ⅱ　下呂市と岩屋ダム受益市町村との交流事業
旧金山町では、岩屋ダム受益市町村との交流を活発化し、地域活性化につなげるため、平成12年以降、地域間交流が実施され、合併後の下呂市にも引き継がれている。
・名古屋市…鍋屋上野浄水場イベントでの物販販売、小学校との教育交流（合併以降、消滅）
・春日井市…春日井まつりでの物販販売、小学校との教育交流（合併以降、消滅）
・岩倉市　…桜まつり・岩倉市民ふれあいまつり等での物販販売
・清洲市　…清洲ふるさとまつりでの物販販売
・尾張水道連絡協議会…金山及び馬瀬花火大会への協賛

（出典）下呂市総合政策課の提供資料により作成

たが、市町村合併以降は消滅している。今後、地球温暖化問題が深刻化するなか、森林の持つ二酸化炭素の吸収機能が重要視されるなかで、下流域の子どもたちが、上流域の公益的機能を学習したり、上流域地域の生活や文化、産業などへの興味・関心を深め、相互の理解につなげていくためには、農山村体験交流事業は、非常に有効な手段になると考えられる。

3－2　地域活性化における可能性と課題

体験交流プログラムの提供体制

第2章で紹介したとおり、下呂市内では健康、森林、農業、自然、伝統文化などの体験交流プログラムが豊富に存在し、多様な主体により提供されており、これらをうまく組み合わせることにより、児童・生徒が市域内において長期間の宿泊体験活動を楽しむことが可能となる。

しかし、個々の体験交流プログラムでは、多くの児童・生徒を指導できる人材不足や危険が伴う体験活動に対する責任体制など様々な課題を解決していく必要がある。また、相互の体験交流プログラムを有機的に連携させ、農山村体験交流事業として、商品企画化し、子どもの受入を手配したり、広く商品をPRするなど、総合的な受皿体制づくりが求められている。

宿泊施設受入体制

下呂温泉には、約50軒のホテル・旅館等があるが、宿泊施設ごとに経営方針が異なるため、修学・教育旅行を誘致・受入れていない。また、個々の宿泊施設としても、一部のホテルで冬の閑散期にスポーツ合宿を受入れた実績はあるが、修学旅行は全く実績がない状況にある。一方、市内の他の宿泊施設としては、小坂や馬瀬地域など周辺地域に旅館・民宿が多数あるとともに、位山自然の家や御岳少年自然の家など宿泊研修施設もあり、市域全体として、農山村交流体験事業を受入可能な宿泊施設としては、現状においても十分に確保されている状況にある。

このため、地元観光関係者間において、農山村交流体験事業の効果や必要性等を十分に理解し、実際に子どもたちを受入れ、体験交流プロジェクトとも連携できる宿泊施設の協力体制づくりを推進していく必要がある。

農山村体験交流事業の経済的・社会的効果

子どもの農山村体験交流事業の成功事例としては、飯田・下伊那地域がある。この地域では、観光資源に乏しい地域であったため、1999年に地元市町村と民間会社が出資し、日本初の地域受入型専門会社である（株）南信州観光公社を設立し、農業や自然体験など地域資源を活用した子ども向け体験型教育旅行を追求してきた。現在では、年間延べ160校以上の学校が訪問し、プログラム体験者は約4万人が参加するまで拡大しており、体験型教育旅行を楽しんだ子ども達がリピーターとして親子連れで再訪問したり、知名度や魅力向上にもつながっており、地域全体で年8億円以上の経済波及効果を発揮している。

また、子ども向け農山村体験交流事業を実施した場合には、こうした経済的効果ばかりではなく、受入れた民宿やプログラム提供団体の人々の日常生活にも活気を与えたり、体験交流プログラムづくりの過程では、地域資源を再発見したり、地域人材の発掘にもつながっている。

このため、下呂市においても、農山村体験交流事業を実施した場合には、直接効果ばかりでなく、楽しい体験をした児童・生徒が、再度家族連れで下呂市を訪問するリピーター効果や交流体験活動団体等の活力向上など、様々な相乗効果が期待できる。

第4章　実施（または発展）に向けた提言

下呂市では、第3章で紹介したとおり、多様な主体による地域資源を活用した体験交流プログラムと宿泊施設等が十分に存在している。また、国では、3省が連携する「子ども農山漁村交流プロジェクト」として、5年後までに、全国の小学5年生が1週間程度の宿泊体験活動が実施できるように、受入可能な地域づくりを全国的に拡大する取組が開始されている。

このため、市内の豊富な体験交流プログラムを発掘・把握し、受入可能な宿泊施設との有機的な連携を推進するため、地域が一体となり、子どもの農山村体験交流事業を実施する組織を設置していくことが求められる。組織には、①情報交流、②人材育成、③市場開発などの機能を持たせる一方、地域密着型旅行商品の企画、地域での申込受付や受入の手配、学校へのPR等を提供できる体制づくりを進めていくことが求められる。

具体的な事例として、第3章で紹介した飯田下伊那地域の（株）南信州観光公社以外にも、近隣地域では、「子ども農山漁村交流プロジェクト」のモデル地域に選定された高山市の「ふるさと体験飛騨高山」や郡上市の「郡上・田舎の学校」など、都市農村交流事業に取り組む活動団体で構成される受け皿づくりが推進されている。

農山村交流体験事業による滞在型温泉地づくり

国では、観光立国推進基本法のもと、地域が主体的に創意工夫し、魅力ある滞在型観光地を促進する環境が形成されつつある。2007年に旅行法の施行規則が改正され、地域を熟知した観光協会やホテル・旅館等の地元観光事業者が、募集型企画旅行を実施可能[*1]となり、既に全国各地で地域独自の魅力を活かした地域密着型ツアーを企画・販売する取組が始まっている。さらに、複数市町村にまたがる名所や温泉を巡る2泊3日以上の滞在型観光地づくりを目指して、観光圏整備計画を策定し、景観や案内標識整備等のハード面での連携を促進したり、旅館・ホテル等が、圏域内の周遊ツアーとして、旅行商品の企画・販売が可能となるなど、宿泊客の滞在を促進する仕組みが形成されつつある。

第3章で紹介したとおり、下呂温泉を活用した農山村交流体験事業は、あまり現実的ではなく、下呂温泉では、上記のような新たな仕組みを活用した滞在型観光地づくりを推進していくことが想定される。しかし、下呂市全体で農山村体験交流事業を推進することにより、多様な体験交流プログラムの提供体制の強化にもつながり、下呂温泉の観光事業者が企画・販売する滞在型旅行商品における魅力的なメニューづくりにもつながる。また、第3章で紹介したとおり、農山村体験交流事業を体験した子どもたちが、親子連れで下呂温泉を訪問したり、下呂温泉の知名度や魅力の向上にもつながるなど、下呂温泉にも間接的な相乗効果が期待される。このため、下呂市としては、下呂温泉と体験交流プログラムを組み合わせた「滞在型温泉地」づくりの促進策の一環として、積極的に農山村体験交流を推進していくことが求められる。

木曽川上下流の新たな相互理解・交流の機会づくり

下呂市では、木曽川下流域の住民に対して、水源涵養や土砂災害防止、二酸化炭素吸収など公益的機能を果たしている森林や馬瀬川、岩屋ダムを有している。また、市内の小中学校向けには、これらの地域資源を活用した森林環境学習や沢登り体験、岩屋ダム体験学習などの体験交流プログラムを既に提供している。

このため、名古屋市をはじめ、木曽川下流域の子ども向けに、下呂市で宿泊しながら、森林環境学習や自然体験を経験できる農山村体験交流事業を提供することにより、下流域の子どもが上流域の公益的機能を学習したり、上流域地域の生活や文化、産業などへの興味・関心を深めることにつながる。また、下流域の小学校としても、「子ども農山漁村交流プロジェクト」として、今後、長期宿泊体験できる地域を探していく必要があり、下呂市で農山村体験交流事業が提供できば、日頃から多大な恩恵を受けており、相互理解を深め、農山村で宿泊体験学習ができる最適地となる。

また、下呂市の小中学校においても、農山村

[*1] 一定条件（①催行区域は営業所のある市町村及び隣接する市町村区域内、②旅行代金は当日払い）のもと、第3種旅行業者が募集型企画旅行を実施することが可能となった。

体験交流事業の交流体験プログラムとして、上下流の学校間交流を併せて実施することにより、相互理解・交流にもつながるとともに、子どもの農山村体験交流事業を契機として、沈滞ムードにある木曽川上下流の新たな地域間交流事業が展開できれば、地域活性化の側面からも大きな経済波及効果が期待できる。

健康増進や自然環境に特化した体験交流プログラムの提供体制づくり

下呂市は、美しい自然や景観に恵まれた地域であるが、第1章で紹介したとおり、これまでグリーンツーリズムを推進していない一方、県内各地でグリーンツーリズム事業が増加傾向にあり、新たな特色を打ち出していく必要がある。下呂市内には、下呂温泉をはじめとする温泉や体験交流プログラムが多数存在しており、これらを融合させ、森林や自然、温泉、食事を活かした健康増進・自然体験交流プログラムを構築し、子どもの農山村体験交流事業にも取り入れることにより、他地域とも差別化し、集客力を高めることが可能となる。

また、最近では、生活習慣病の一因であるメタボリック対策として、旅行を通じて生活習慣を見直すことを目指すヘルスツーリズムや森林療法に健康食、温泉、文化を楽しむ森林セラピー基地構想は、健康増進と自然環境をうまく組み合わせた地域密着型のニューツーリズムとして期待されており、農山村体験交流事業としても、これらを追求することにより、他地域にはない独自の体験交流プログラムが提供できる魅力的な観光地づくりを推進することにもつながる。

おわりに

下呂市の観光としては、下呂温泉を中心とした宿泊客数が長期間にわたり減少傾向にある一方、旅行者が利用する交通形態が公共交通機関から自家用車へと変化し、高速道路から約1時間もかかるなど、交通アクセスの面では大変不利な条件にある。

また、2008年7月に東海北陸自動車道の全線開通が迫っており、近隣の郡上市や高山市、飛騨市では、高速道路の全線開通による交通アクセスの向上を見越して、市域内での滞在時間の延長を目指す戦略的な観光事業が展開されつつある。

今後、下呂市では、こうした地域とも競争しながら、市民の生活や経済を支えていくためには、市域全体が一丸となり、魅力的な滞在型観光地づくりが求められている。今回の訪問調査を通じて、地元の観光関係者には、滞在型観光地づくりの必要性は十分に認識されており、下呂温泉のホテル・旅館が農家と連携して地元食材を提供したり、滝めぐりや農業体験など体験交流プログラムとの連携を進めたり、健康保養地温泉として新たな旅行商品づくりを進めるなど、滞在時間や魅力の増大に取り組む事例が多く現れてきているが、市域全体の取組にまでは至っておらず、下呂温泉を中心とした滞在型温泉地づくりに取り組んでいる状況にある。

今後の新たな観光対策としては、下呂温泉を中心とした滞在型温泉地づくりに加えて、市町村合併による広域化のメリットとされる周辺地域を含めた豊富にある地域資源を有効活用しながら、市民や事業者、各種団体、行政等が相互に連携し、他地域にはない独自の交流体験プログラムが提供できる観光地づくりを推進することが求められる。さらに、一層の人口減少が見込まれるなか、市域全体として、これらの体験交流プログラムと多数存在する宿泊施設、地元食材や特産品等とも有機的に相互連携させる仕組みを構築することにより、裾野が広く、相互に波及効果が高い一大観光関連産業を形成し、自立的発展につながる地域内経済循環につながっていくことを期待したい。

最後に、今回の研究論文作成にあたって、2回にわたり「岐阜ほんもの体験交流プログラム」現地調査を実施した際に、ヒアリングや意見交換等にご協力いただいた下呂市の各種活動団体、財団法人、市役所など関係者の皆様に心から感謝するとともに、体験交流事業を丁寧にご説明いただいたにも関わらず、紙面の都合上、現地調査した全ての活動団体の体験交流事業を紹介できなかったことに対して、この場を借り

てお詫び申し上げる。また、現地調査に同行し、調査報告書をまとめていただいたコミュニティ診断士の和田正尚氏、曽我喜美子氏の２人にも多大なご協力を賜り、ここに深く感謝とお礼を申し上げる。

《参考文献》

・岡田知弘（2005）『地域づくりの経済学入門』（自治体研究社）
・岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部（2007）『地域資源を活用した「子どもの学び場の創出」と観光資源化に関する調査研究』
・農林水産省、文部科学省（2007）『学校教育で子ども達に農山村漁村体験を！』
・地域間交流促進に関する研究会（2004）『地域間交流を通じて子ども達の豊かな体験活動の充実を図るために―地域間交流の促進に関する調査―　中間とりまとめ』（文部科学省）
・下呂市（2007）『下呂市市勢要覧―資料編―』
・下呂市（2007）『下呂市第１次総合計画』

《調査協力者》

９月17日（月）	南ひだ健康道場、位山自然の家、NPO法人飛騨小坂200滝、南飛騨自然塾、あぶらめ学校、栃もちづくり研究会、ヤマセミの会
９月18日（火）	下呂石工房、馬瀬川フィッシングセンター水辺の館、下呂市役所（総合政策課、観光課）、下呂温泉観光協会
11月２日（金）	米ほたるの会、岩陰遺跡、４つの滝、阿弥陀入来寺十王堂、田上農園池の島公園ぎふ蝶観察会
11月３日（土）	農地・水・環境保全対策事業、鳳凰座保存会、竹原川を守る会、栃本農園